

はじめに

共同研究代表・鈴木そよ子

神奈川大学教職課程では、横浜キャンパスと湘南ひらつかキャンパスの教員がともに、2007年度から2009年度までの3年間、「教員のキャリア形成に果たす神奈川大学の役割」というテーマのもとで共同研究を進めてきた。

共同研究を始めた背景には、この間の教師教育をめぐる全国的な動向がある。2006年7月の中央教育審議会答申を受けて、教員の「資質能力」の向上と教職に対する信頼の確立を目的とした教員免許更新制が導入され、教職大学院が新設され、教職実践演習が新設されるなど、教師教育に関する制度改革が進められてきた。これらは、多くの大学が組織として現職教育に関わるという新しい事態をもたらした。

私たちは、この間の教師教育をめぐる施策が現場の声を把握することなく進められていることに強い危惧を覚えた。そして、このような状況の中で、現職教員が大学を研修の場としてみたときに望むことや、教員養成教育に期待すること、また、私たち自身が教員のキャリア形成のために取り組むべきことを明確にしたいという思いで、共同研究を始めた。この間の政権交代に伴い、政策がさらに大きく変わろうとしているなかで、本共同研究のテーマはより一層重要性を増していると考えた。

本報告書における報告並びに論文は総論と各論からなっている。総論として、「Ⅰ研究目的と調査実施概要」「Ⅱ質問紙調査結果の概要」において、共同研究の全体像と質問紙調査、インタビュー調査の概要についてまとめたうえで、

各論において、調査項目の分析担当者としての立場を離れて、調査全体から得たものを研究者としての関心にもとづき論文として発表している。

本共同研究によって、教員が大学を研修の場として見たとき、大学の設備や施設を活用した研修を望んでいること、通常の研修では得られない小・中・高等学校の校種を越えた意見交換の場を求めていること、大学教員による専門分野の最新情報の提供を期待していること、教職を目指す学生たちとの交流で教員養成に寄与したいと考えていること、教職課程が中心となったネットワークづくりに期待していること等が把握できた。

神奈川大学の卒業生を調査対象とし、神奈川大学の役割を考えるための調査であったが、大学と小・中・高等学校教員のキャリア形成をつなぐ視点を導き出せたと私たちは見ている。これらの期待や要望を把握できたことは、研究においても教職課程運営においても、これまでの在り方を見直し、新たな取り組みを始める契機となった。

本報告書は、研究成果を公にするものであると同時に、多忙な校務の合間を縫って、質問紙調査ならびにインタビュー調査にご協力いただいた卒業生の方々への報告でもある。

なお、本共同研究は、2007年度から3年間、神奈川大学共同研究奨励助成金という形で本学からの支援を得て実施できたものである。